限局性学習症の“限局性”について考える

～　全般的な知的能力との関係との関係を中心に　～

企 画 者　：　藤岡　徹（福井大学）
司会者　：　平谷　美智夫（平谷こども発達クリニック）
話題提供者　：　平谷　美智夫（平谷こども発達クリニック）
石坂　郁代（北里大学医療衛生学部）
河野　俊寛（金沢星稜大学）
伊藤　一美（星槎大学大学院）
指定討論者　：　藤岡　徹（福井大学）

【企画の趣旨】

平谷こども発達クリニックは発達障害に特化した民間クリニックであり、限局性学習症（Specific Learning Disorder; SLD）への取り組みも多くなされている。LD 研究では「発達性ディスレクシア（DD）には注意欠如多動症（ADHD）や自閉スペクトラム症（ASD）が併存しやすく、それが併存すると DD 児の学習面での問題は保護者と教員から報告されにくくなること」を報告した（藤岡ら, 2014 ; 藤岡ら, 2015）。この結果を中心に、DD の見落とし防止についての啓発を行ってきた。

ASD と ADHD の他にも、SLD と知的レベルとの関係は重要である。なぜならば、知的発達症（ID）でも読み書きや計算の遅れが生じうるが、SLD のような特定領域のみに遅れが生じることとは質的に異なることが予想されるためである。当クリニックの山口（2015）は DD 児を対象として、ひらがな音読検査（単音、有意味単語、無意味単語、文章）（稲垣ら, 2010）の音読速度は、音韻処理に関係するとされる WISC-IV のワーキングメモリーとは負の相関を認めたが、WISC-IV の言語理解と知覚推理と処理速度とは相関を認めなかったことを報告している。これは DD 児の読字を対象にした限定的な結果であるが、全般的な能力と SLD の特性は分けて考えるべきことを意味していて、SLD の合理的配慮や支援を考える上で重要な観点となる。そこで、このシンポジウムでは、全般的な遅れである知的発達症（ID）や他の全般的な能力との関連を踏まえ、限局性学習症の限局性について改めて把握することを目的とした。最初に SLD と ADHD・ASD・ID の併存に関して、医学的な立場から総論を述べる。その後、読字障害/DD、書字障害、計算障害の限局的な困難について、それぞれの専門家から ID や他の全般的な能力との比較を交えながら説明をする。

「発達性ディスレクシアと診断された 224 例の背景要因の検討」

平谷　美智夫

【目的】当クリニック（CL）で近年 DD の診断が急増している。これは①診断・治療のための実践ガイドライン（稲垣ら, 2010）による診断基準の明確化②就学後の児童の読み書き評価を CL でルーチン化したこと　③読み書きの問題で紹介受診する児童の増加（SLD の概念の広まり）によると思われる。そこで、医療機関の現状を報告するため、SLD を代表して DD の背景要因を検討した。【方法】以下の項目を検討した　１）発達障害全般の診断 : 発達歴聴取・園や学校での様子・ADHD や ASD 関連のアンケート・神経学的診察・発達/知能検査・行動観察をもとに診断　２）読み書き評価 : 本人の困り感の聞き取り・担任のレポート・読み書きの正確性と流暢性の検査｛STRAW（宇野ら, 2006）とひらがな音読検査（稲垣ら, 2010）｝の実施　３）音韻認識検査【結果と考察】2015.6 までに 224 例を DD と診断した。①併存症 : ADHD(56 例)、ADHD 疑い(23 例)、ADHD(疑い含む)+ASD(93 例)、ASD(29 例)、DD 単独(23 例)。②IQ : 101 以上（39 例）86～100(83 例)、71～85(71 例)、70 以下(知的レベルと読み困難より総合判断 ; 25 例)。DD は併存症を伴う率が高く、IQ85 以下の境界域知能の割合が多かった。当日は、きょうだい例（発達障害のきょうだい例で少なくとも 1 名が DD ; 32 組)・年間診断数・男女比・始語 2 語文の出現時期などにも言及する。

「境界域知能事例の音読の様相」

石坂　郁代

【問題の背景】DSM-5 において IQ と読みの達成度の乖離の記述がなくなったとはいえ、境界域知能（IQ70～84）の事例の音読の様相の検討は未だ十分ではない。山口ら（2015）は知能検査との関連を検討したが、先行研究にあるように言語発達面との関連も加味して検討することも重要であろう。【目的】境界域知能事例の音読検査結果の質的検討から、SLD の音読の特徴についての考察を試みる。【方法】小 4 から中 1 までの FSIQ70～81 の 7 事例について、ひらがな音読検査（稲垣ら，2010）と言語発達面（理解語彙検査および音韻意識課題）の結果の関連性を質的に検討する。【結果と考察】境界域知能事例の言語発達面の様相はそれぞれ異なっており、一般化は容易ではない。しかし先行研究において逐字読みから単語のまとまり読みに移行する際には語彙力が重要であると考えられている点については、本研究でもその傾向は認められた。この結果は、SLD の限局的な障害（言語能力のある側面が読み書きの限局的障害の要因となる）に関する本質的理解の一助となると思われる。

「知的障害児への読み書き指導事例」

河野　俊寛

ひらがなに比較してカタカナの読み書き学習が進まない知的障害特別支援学校在籍の中学部男子 2 名（IQ55 と IQ47）に対して、読み書き障害の評価に使用する各種検査（読み書き検査、音韻意識検査、視覚認知記憶検査、聴覚記憶検査、語彙力検査）を実施した後、日常生活で使われる頻度の高いカタカナ単語を、正確に音声化するのではなく、かたまりとして認知でき意味が理解できるようにすることを目的とした読み書き指導を、第 1 期（6 月から 7 月：全 11 回）と第 2 期（9 月：全 11 回）に、朝礼前や昼休みの時間に 1 回 10 分程度実施した。指導は特別支援学校の教師が行った。第 1 期と第 2 期のプリント課題の正答数と解答時間の平均、及び、指導前と第 2 期終了時の STRAW のカタカナ書字成績を比較した。その結果、第 1 期に比較して第 2 期の正答数と解答時間が向上しており、第 2 期終了時のカタカナ書字成績も指導前の成績と比較して向上していた。これらのことから、知的障害児において、読み書き障害児への指導法を取り入れることで，文字の読み書きが改善する事例が存在する可能性が明らかになった。

「計算のつまずきはどこから生じるのか？」

伊藤　一美

算数障害の主要な症状は計算に認められると考えられているため、ここでは、計算障害と呼ぶ。計算障害の特徴については、たとえば DSM-5 では、単なる計算学習の遅れではなく、特異なつまずきを示すことが示唆されている。具体的には、他の子どもが暗算できるような計算問題で、数えるというような計算方略を使用し続ける特徴があること、筆算の手続きがスムーズに処理できないことがあげられる。これらは、計算方略と計算手続きの問題であると考えられる。

一方、計算のつまずきは、計算障害の子どもにのみ認められるものではなく、多くの子どもに認められる症状である。計算につまずきを示す子どもの特徴を、計算方略と計算手続きの観点からていねいに分析してみると、数の概念的な知識につまずきがあり、計算学習につまずいている事例と、数の概念的な知識を問う課題はクリアしているのに、計算学習につまずいている事例がいることに気づく(伊藤, 2013；2014；2015 等)。以上のような事例をとおして、SLD の限局的な計算障害はどこにあるのかということについて、数の概念的な知識と、計算方略、計算手続きの観点から、いくつかの事例をとおして、論じる。

キーワード：限局性学習症，併存症，知的能力障害